

新宮撰歌合 建仁元年三月 全注解稿 (三)

奥野 陽子

情報科学部 情報システム学科

(2009 年 9 月 30 日受理)

Commentaries on the Works of the *Shin-gū Senka-awase* (Part 3)

by

Yoko OKUNO

Department of Information Systems, Faculty of Information Science and Technology

(Manuscript received September 30, 2009)

新宮撰歌合 建仁元年三月 全注解稿 (三)

奥野 陽子

情報科学部 情報システム学科

(2009 年 9 月 30 日受理)

Commentaries on the Works of the *Shin-gū Senka-awase* (Part 3)

by

Yoko OKUNO

Department of Information Systems, Faculty of Information Science and Technology

(Manuscript received September 30, 2009)

Abstract

The purpose of this paper is to compare various texts of the *Shin-gū* poetry contest and provide notes on the poems and judgments given in the contest. The poems were selected in the third month of the first year (1201) of the *Kennin* period. It was just before the compilation of the *Shin-Kokin Waka-shū* was begun in earnest. This contest was undertaken by *Gotoba-no-in*, who was later to order the compilation of the *Shin-Kokin Wakashū*. The central figures involved in *Shin-Kokin Waka-shū* selection participated in this contest. The participants criticized each other's works anonymously. Nine works from the contest were later included in the *Shin-Kokin Waka-shū*. Therefore the careful interpretation of each poem in the contest is also essential to understanding the *Shin-Kokin Waka-shū*.

キーワード： 和歌, 新宮撰歌合, 注釈

Keyword： *Tanka*, *Shin-gū Senka-awase*, Commentary

新宮撰歌合 建仁元年三月 全注解稿 (三)

情報科学部 情報システム学科 奥野 陽子

(二〇〇九年九月三〇日受理)

一

本稿は、「新宮撰歌合 建仁元年三月 全注解稿 (二)」(『大阪工業大学紀要 人文社会編 五四巻 第一号 二〇〇九年一〇月』)に続いて、新宮撰歌合 全三十六番のうち、十六番から二十一番までの注解を試みるものである。

底本は、『新編国歌大観』と同じく貞享二年刊『歌合部類』本にひとま ず従うこととし、内閣文庫本(二〇一・一四七)を用いて、以下に掲げる 写本で校合した。書名の下に記号は所蔵者の整理番号である。↓印の下に 本稿での略称を示す。校異は、和歌についてはすべて掲げるが、複数の写 本が同じ本文である場合、用字については先頭に掲げるものに従う。和歌 以外の部分(難陳、判詞)の校異は、私意により主要な部分のみを和歌の 校異の後に記すことにする。目次・集付・歌題・作者名の校異は省略する。

宮内庁書陵部本

五〇一・五八四

京都府立総合資料館本(和泉書院影印叢刊73による)

特費八三一・五一

水府明徳会彰考館本(国文学研究資料館紙焼写真による)

已・一二

国立公文書館内閣文庫本(同右) 二〇一・二〇九

刈谷市中央図書館村上文庫本(同右) 一六七・一

神宮文庫本(同右) 三・九八二

島根大学附属図書館桑原文庫本(同右) 九一一・一八・Sh六二

祐徳稲荷神社中川文庫本(同右) 六・二一二・二二七四

(資料館書誌ID一〇〇一八六〇六二)

↓ 中一
↓ 宮
↓ 京
↓ 彰
↓ 内
↓ 刈
↓ 神
↓ 桑

祐徳稲荷神社中川文庫本(同右) 六・二一二・二二七四

(資料館書誌ID一〇〇一八六〇六四)

熊本大学付属図書館北岡文庫本(同右) 一〇七・三六・七

篠山市立青山歴史村本(同右) 二五〇

篠山市立青山歴史村本(同右) 一九一

肥前嶋原松平文庫本(同右) 一三八・五三

↓ 中二
↓ 北
↓ 青一
↓ 青二
↓ 松

本文の校訂は、底本が明らかに誤写・誤脱したと認められるものに限り、その旨を校異の欄に示す。

本文は、読解の便宜上、次のように処置した。

・用字は通行字体に改めた。

・仮名遣いは底本のままとし、歴史的仮名遣いと異なる場合には、歴史的仮名遣いを()に入れて傍記した。

・私意により清濁を区別し、句読点・「」等を付した。

・仮名には、適宜漢字を宛てたが、底本の仮名表記を振り仮名として残した。

・反復記号は底本のままとした。但し、品詞が変わる場合と、漢字を宛てることと送り仮名となった場合は仮名に改め、記号は振り仮名として残した。

・難読漢字その他には、()内に読みを記し、漢文体の箇所には訓点を施した。

・底本の改行とは無関係に、難陳と判詞の箇所を改行した。また、一行空きにするなど、割付を多少変更した箇所がある。

・和歌には、新編国歌大観番号を付した。

注釈は、校異・他出文献・通釈・本歌の順に掲出し、その後に○を付し

て、語や句を挙げ、語釈にとどまらぬ、一首の詞続きや修辭などから生じる意味について解説した。さらに補説や考察がある場合は▽以下に記した。引用は、和歌・歌合等は新編国歌大観、漢詩は和漢朗詠集など出典が新編国歌大観所収のものはそれに依った。白楽天の詩については、白楽天全詩集（佐久節訳注 日本図書）の訓に依った。また、古来風体抄等の歌学書は日本歌学大系、伊勢物語等の物語類は新編小学館日本古典文学全集に依った。但し、いずれも私意により表記を改めた場合がある。

二

十六番 湖上暁霧

31 志賀^{しが}の沖やいづくを霧の隔^{へだ}つらん浪より出る有明の月
右 勝 山家秋月 （前権僧正慈円）

32 影清き月より落^おつる袖の雨の雲は秋の夜軒^のは山の端^は
右 申^{まうしてはく} 云、左歌は只^{ただ}望^{のぞ}み秋月之出^{しづる}心也。暁霧の隔^{へだ}てなし。題の心如何。左無^な申^し旨^し。
判者云、右歌、心詞尤よろし。興あり。仍^いリテ為^レ勝^ト。

【校異】

31 しかの沖や—志賀のおき^{おき}や（刈）、しかの奥や（神・青二）、しかのおき（北）、志賀の奥（京）

いつくを霧の—いつくを霧の（刈）

32 袖の雨の—袖の雨に（桑・中一・中二・松）、袖の雨は（京）

軒はやまのは—軒は山^のさと（宮）、軒は山里（彰）

底本は作者名を欠脱するので、他本により補訂する。

難陳・判詞

只望秋月之出心也—た、秋月の出るのをそむ心や（宮）、た、秋の月の出るのをそむにて（京・北）、望秋月（彰）、只望秋月の出^{しづる}（刈）、只望秋月心也（内）、只望秋月（神・桑・中一・中二・青二・松）、只望秋月心歟（青一）

暁霧のへたてなし—さらに暁のきりのへたてなし（宮）、暁の霧のへたてたる事なし（京・北）、暁のへたてなし（彰・神・桑・中一）

中二・青二・松）、更^い無^な暁霧之隔^{へだ}なし（刈）、暁霧隔^{へだ}於浪^{なみ}（内・青二）
題の心如何—於題意如何（宮）、題の心にをひて（京・北）、於出題心如何（刈）、如何（内・青一）

左無^な申^し旨^し—左方申旨なし（宮）、右歌左方無^な申^し旨（京・北）、左申旨（内）
心詞尤よろし—心ことはともに（宮・京・北）、心詞尤（刈）、心詞（内・青一）

興あり—興ありて（京・北）
仍^い為^レ勝^ト—勝とす（京・北）

【他出文献】

31 夫木和歌抄 雑五 一〇六一〇（「建仁元年十首歌合、湖上暁霧」）
歌枕名寄 志賀篇 五九三六（「奥 新宮撰歌合」）

32 夫木和歌抄 秋四 五二五八（「建仁元年十首歌合、山家秋月」下句「くもれば出づる秋の山のは」、和歌口伝抄 一九（第一句「さやかなる」第三句「袖の雨」）

【通釈】

十六番 湖上の暁霧（湖の上にかかる暁の霧）

左

通具朝臣

31 志賀の沖よ。いったいどこを霧が隔^{へだ}てているのだろうか。浪から出てくる有明の月であるよ。

右 勝 山家の秋月（山家で見える秋の月）（前権僧正慈円）

32 光も清い月から落ちてくる袖の雨の、（雨を降らせる）雲は秋の夜であり、（そこから月光が漏れてくる）軒は（この山家では）山の端であるよ。——清らかな月の光を見て落ちる袖の涙の、その雨をもたらす雲は秋の夜の風情であり、この山中の住まいでは、月光が漏れてくる軒にあたるのは山の端であることよ。

右方が申しますことには、左歌は、ただ秋月の出るのを望む心である。「暁霧」の（題の本意たる）隔^{へだ}てが詠まれていない。題の心にとつてどうであろうか。左方は、申すことが無い。

判者が言うことには、右歌の心も詞もまことに結構である。興趣がある。故に右を勝とする。

○題—十六番は左右異題。左は「湖上暁霧」、右は「山家秋月」。

31

○志賀の沖や—志賀は近江国歌枕。琵琶湖の湖西部、大津市。琵琶湖と比良山地に挟まれた地域で、天智天皇大津宮があつた所。志賀は新古今時代に好まれた歌枕であり、本歌合にも四例を見るが、「志賀の沖」という詞続きはこの歌以外には見出せない。「志賀の沖」は、志賀の湖畔に立って、東の方角にあたる沖を望み見たのである。東方は、「有明の月」が昇る方角である。初句「や」で詠嘆をこめて切れる句法。

○いづくを霧の隔つらん—どこを霧が隔て隠しているのであらうか、の意。隔て隠している場所が見えない状態をいうと考えられる。すなわち、詠手としては、沖の方、茫々として、霧が立ちこめているばかりの景色を表現しようとしたか。ただ、この句は、霧が隔てているのはどこか、どこにも見えない、の意にも受け取れるので、右方から「暁霧の隔てなし」との難陳が出たのであろう。

○浪より出る有明の月—「有明の月」は、陰暦十六夜以降の月で、夜が明けても空に残る月であるが、ここでは、その月が出る夜更けの時間を詠んでいる。「浪より出る」は、用例としては、この歌が最初であるが、後の例を見れば、おおかた霧のかかっている状態において詠まれている。

・末の松まつ夜ふけゆく空、晴れて、浪よりいづる山の端の月、（有家朝臣 千五百番歌合 秋二 一二八〇）

・ほのぼのと明行く空に霧晴れて、波よりいづる淡路島山（関白（教実）洞院 撰政治家百首 雑 一六九〇）

・須磨の浦やあまとぶ雲の跡、晴れて波よりいづる秋の夜の月、（女房（道家） 名所月歌合 貞永元年 四五）

「浪より出る」という表現では、波は見えていることになるので、その点においても、右方の難陳は当を得ているといえよう。

32

○影清き—月光が清いの意。月の光の澄みきった様子をいう。二句の「月」にかかる。

・影清き夏の夜すがら照る月を、あまのと渡る舟かとぞ見る（好忠集 一四三）

・影清き夜渡る月のさえゆくをまだそれならで誰惜しむらん（夜深見）

月」仲実 和字一字抄 一一八二）

・影清き月を横切る浮雲は秋の名をさへけがしつるかな（経盛の家の歌合に、月を「有房集 一八〇）

○月より落つる袖の雨の—「袖の雨」は衣の袖をぬらす雨で、涙で袖がぬれることをたとえていう。

・世の中を思ひはいれじ袖の雨にたぐはば月の曇りもぞする（「百首歌中に、月の歌とて」三位中将公衡 玄玉集 一二二）

ここではその袖の雨が、「月より落つる」（「月から落ちる」と表現されているところに、詞続きの面白さがある。「月より落つる」は、ここでは澄みきった光を放つ月が原因で落ちる涙であることを表現するものである。「月より落つる」という表現自体は、建久九年の良経歌に例があり、そこでは判者俊成によって「月より落つるなど……すがた心ともに勝劣分きがたく侍り」と評価されている。

・片岡の麓の稲葉末さわき月より落つる峰の秋風（秋の歌あまたよみける中に」後京極殿御自歌合 七七）

三句末「の」は、序詞末の「の」のように、「よ」に通う喚体性の「の」で、ここですっきり切れて、さらに、「その雲は」と下句に続く。

○雲は秋の夜—月を曇らせ、雨を降らす雲にあたるものは「秋の夜」である、の意。「秋の夜」は次の古今集歌に代表されるように、物思いの最も激しくなるときである。

・いつとは時はわかねど秋の夜ぞ物思ふ事のかぎりなりける（是貞の親王の家の歌合の歌」よみ人しらず 古今集 秋上 一八九）

秋の夜の物思いの涙が雲のように月を曇らせるといのである。

○軒は山の端—「軒もる月」「軒端の月」という成句があるように、屋内へは軒端から月の光がもれてくるものである。しかし、ここは「山家」であるから、月光は軒端ではなく、山の端から射してくるといのである。

難陳・判詞

○興あり—面白みがある、興味がある、の意。本歌合以前の俊成の用例を挙げておく。

・右、これは、そらさへと侍るにや、これもこころすがた興ありては侍るを（広田社歌合 十二番判詞）

・左の、しでかけそふるといひ、右の、神もさこそはなぞいへるころ
いづれも興ありてはみえ侍るを（広田社歌合 十七番判詞）

▽右方が左歌の落題を指摘したのに対して、俊成はそれには触れず、右歌の優れたことをとりあげて勝とした番である。

▽和歌口伝抄には、「詩の心を以て五品と云ふ事有り」とする五品の一つとして「皎潔」をあげ、32番歌を例としている。

皎潔とは、うちぎ、にはきと心得がたくて、しかも能々案ずればえんなる体なり。

さやかなる月よりおつる袖の雨雲は秋の夜軒はやまのは

慈鎮和尚は此体をこのみて詠ぜられける也。

「ふと聞いたときにははつきりとは理解できにくい、しかもよくよく思案すると優美な風体」というのは、この歌の「月より落つる袖の雨」「雲は秋の夜」「軒は山の端」といった詞続きによくあてはまる。

十七番 嵐吹寒草

左

内大臣

33 秋はてゝあはれは猶ぞ残りける花もあらしの野辺の夕暮

右 勝 山家秋月

定家朝臣

34 宮古人さらでも松の木の間より心づくしの月ぞもりくる

判者云、右為勝ト。

【校異】

33 秋はてゝ―秋はてゝ（宮）、秋あはてゝ（彰）、秋はてし（神）

残りける―残りけり（彰）

34 さらでも松の―さらでは松の（刈）、さしてもまつ（中一）

月ぞもりくる―月ぞもりくる

難陳・判詞

右為勝―右をもて為勝（宮・京・刈・内・北・青一）、右勝とす（桑・

中一・中二・松）

【他出文献】

33 三百六十番歌合 冬 四四七（第二、三句）「あはれはなほものこりけり」

【通釈】

十七番 嵐、寒草を吹く（嵐が、冬枯の草を吹く）

左

内大臣（通親）

33 秋は終わつたが、哀れはやはりまだ残っていることだ。花ももうないであろうと思われる嵐吹く野辺の夕暮よ。

右 勝

山家の秋月（山家で見る秋の月）

定家朝臣

34 都人をそうでもなくとも待つ山家の、（あたりの）松の木の間から、あの心づくしの秋の月の光がもれてくることよ（人恋しい心がさらに増ることだ）。

判者の言うことには、右を勝とする。

【本歌】

34 このまよりもりくる月の影見れば心づくしの秋は来にけり（よみ人しらず 古今集 秋上 一八四・小町集 一〇六・新撰和歌 二四（第二句「おちくる月の」・古今六帖 二九三「秋の月」伊勢）・古来風体抄 二四四・定家八代抄 秋上 三〇三・桐火桶 七七・雲玉集 二〇一・源氏物語紫明抄 六五〇・源氏物語河海抄 一二二六）

○題―左右異題で、左は「嵐、寒草を吹く」、右は「山家の秋月」。「寒草」は冬の枯れた草のこと。寒草を含む題は、「寒草帯雪」（経信集）「雪埋寒草」（在良集）などがすでにあるが、寒草に嵐や風を結ぶ題はこれ以前には見出せない。荒涼とした風景を思わせる題で、当時の好尚がうかがえる。

33

○秋はてゝ―秋という季節がすっかり終わったことをいう。暦月では九月で秋が終わり、十月から冬となる。

・いかなれば紅葉にもまだあかなくに秋はてぬとはけふをいふらん（九月つごもりの日、男女野に遊びて紅葉を見る）源順 拾遺集

雑秋 一一三六

○あはれは猶ぞ残りける―「あはれ」は「秋のあはれ」。秋は「あはれ」の季節である。

・白露のおきしく野辺を見ることにあはれは秋ぞ数まさりける（是貞親 王家歌合 三一）

・ことわりや旅の空にてなく雁は秋の哀を思ひつらねて（紀伊 堀河百首 秋 七〇三）

秋のしみじみとした情趣が、冬になつてもやはり残っているよ、の意。秋の哀れが残っていることを詠む33番歌の先行例を挙げておく。

・物ごとに秋のあはれものこるなり霧の籬にすめる夜の月（寂蓮 正治初度百首 秋 一六四八）

・山おろしよ秋のあはれや残るらんけふもかなしき夕ぐれ空（散位宗長 院当座歌合 正治二年十月）

○花もあらしの―秋草の咲く野を花野という。花は結句の「野辺」に咲くものとしていう。

・秋芽子之 花野乃為酢寸 穂庭不出 吾恋度 隠 孀波母（万葉集 卷十 二二八五）

「あらし」は「花も在らじ」「嵐」の掛詞となつてゐる。この掛詞は地名嵐山の嵐にかかる形で

・あすよりは峰の桜もあらし山春とともにやつきんとすらん（「はな」越前 正治後度百首 九一二）

などとすでに用いられているが、33番歌においては題を担う一首の眼目となる箇所にある。この句は、本歌合より後の千五百番歌合でも

・いまはよも花もあらしの夏山に青葉まじりの峰の白雲（家隆 六一三）

と使われている。しかし、これらの用例では「あす」「よも」などの詞に推量の意が明確であるが、33番歌ではそうではない。その意味では「あら（ず）」との掛詞と見てもよいが、ここでは花が残っていないだろうということが目の前の嵐の激しさから断定的に推量されていると考えて解釈しておく。

○野辺の夕暮―「夕暮」は、秋の「あはれ」が最も發揮される時であるから、秋が果てた後も「あはれ」が残る時として選ばれている。「野辺の夕暮」の句は、公衡集初出で、新古今時代以降に見られる表現である。

・すむ月の色とぞみゆる花すすき露に風吹く野辺の夕暮（「花すすき」公衡集 四四）

・宿からんゆくへもみえぬ旅の空雲ををたのむ野辺の夕暮（「旅」隆信 御室五十首 四四六）

・まねく尾花恨むる葛にこととへばただ秋風の野辺の夕暮（「草花」雅 經 正治後度百首 二三〇）

34

○宮古人さらでも松の木の間より―都人は、この山家に都から来訪する人という。25番歌「古郷人」にも通う。「松」は「さらでも待つ」と掛詞になつてゐる。上句は、寂しい山家にあっては、そうでなくても都人の来訪を待つのであるが、その山家の傍らに生えている松の木の間から、という意味である。「さらでも」の指示するのは下句の情景である。

○心づくしの月ぞもりくる―三句以下、本歌に基づく表現である。本歌の「木の間」を「松」の木の間と具体化して限定し、本歌では、「心づくしの秋」がやってきたことを月光で知るところを、「心づくしの月」と縮約して表現し、巧みである。「心づくしの月」は、秋の、物思ひの限りを尽くさせる月ということである。

▽本歌取を駆使した34番歌を勝としたことはそれなりに納得しうるが、左右の評定の記録も無く、判者の判定が根拠も挙げられずに記されているのは、本文の欠脱が懸念される。

十八番 嵐吹寒草

35 小篠原夜半の嵐は払へども葉分の霜は猶結びけり
左 積阿

36 玉葉 右 勝 山家秋月 女房

柴の戸やさしも寂しき深山辺の月吹く風にさ牡鹿の声
右申 云、左の「小篠原」は、色変らぬ物なれば、枯れたる草に
あらずや。左申云、篠は草也。冬は寒ければ、寒草になどか詠まざ
らむと申。

判者云、右歌あな面白、無左右一勝と定メ申ス。

【校異】

35 葉分の霜は―枯ての霜は（京・北）
36 柴のとや―柴の戸よ（京・北）、しはしとや（刈）

難陳・判詞

左のをさゝはらは—小さゝ原は(彰・神・青二)、左をさゝ原は(刈)、をさゝはら(桑・中一・中二・松)

あらずや—はあらしや(京・北)、あらずと申(内・青二)

さゝは草也—さゝ草也(内・青一)、さゝも草なり(中一・中二)、さらは草や(神)

冬は寒ければ—又にはさむければ(青二)・又にはさむければ(内)

寒草になとかよまさらむと申—寒草になとかよまさらん(宮・彰・桑・中一・中二・青二・松)、寒草になとかよまさらん(神)

右歌あなおもしろ—右のうたをあなおもしろ(刈)、右歌あなおもしろ(神)、右歌あな面白や(桑・松)、右あなおもしろや(中一・中二)、右歌を

あなおもしろ(北)

無左右勝と定申—無左右為勝と定申(内・青二)

【他出文献】

35 夫木和歌抄 冬 六五九四 (建仁元年十首歌合、嵐吹寒草)

36 玉葉集 秋下 六九八 (山家秋月といへる心を)・後鳥羽院御集

一五三〇 (山家秋月)・三百六十番歌合 秋 三四一・題林愚抄 四一九三 (山家秋月)

【通釈】

十八番 嵐、寒草を吹く(嵐が冬の枯草を吹く)

左 積阿(俊成)

35 小篠原を、夜半に吹く嵐は吹き払うけれども、それでもなお、篠の葉の一枚一枚毎に、霜は結ぶことだ。

右 勝 山家の秋月(山家で見る秋の月) 女房(後鳥羽院)

36 玉葉

柴の戸よ、その戸を鎖して、これほどまでもに寂しい深山のあたりの、月を吹く上空の風につて聞こえてくる牡鹿の声よ。

右方が申しますことには、左歌の「小篠原」は、(常緑で)色が変わらないものであるから、枯れた草ではないであろう。左方が申しますことには、篠は草である。冬は寒いので、どうして「寒草」として詠まないだろうか(当然詠むだろう)、と申し上げる。

判者が言うことには、右歌は、ああとでも面白い、いうまでもなく右を勝と定め申し上げる。

○題—十八番は左右の題が異なる。35は「嵐吹寒草」、36は「山家秋月」。

35 ○小篠原—篠が生い茂っている原。葉に置く露、霜、雪や、またそこを吹く風や嵐などとともに詠まれることが多く、ここもそれである。風について

・小篠原玉ぬく露をみるをりはしばしな吹きそ山おろしの風(「露」永

胤 丹後守公基朝臣歌合 康平六年 九)

が早い例である。また霜については、次の例が初出例である。

・玉ほこや朝行く道の小篠原わくる裳裾に霜降りにつけり(「霜」肥後

堀河百首 九二六)

なお、述懐歌であるが、この句を用いた俊成歌が新古今集に入っている。

・小篠原風待つ露の消えやらすこの一節を思ひおこな(「病限りに覚え

え侍りける時、定家朝臣中将転任のこと申すとて、民部卿範光もと

につかはしける」新古今集 雑下 一八二二)

○夜半の嵐は払へども—夜更けに吹く強い荒い風は、(霜を)吹き払うけれども、の意。嵐は強く吹く風なので、「払ふ」と詠まれることが多い。

・月影の澄み渡るかな天の原雲吹き払ふ夜半の嵐に(「永承四年内裏歌

合に」大納言経信 新古今集 秋上 四一一・金葉集初度本 秋 二五八)

・もみぢ葉の散りつむ庭もみるべきに夜半の嵐の吹き払ふかな(「落葉」

田多民治集 八八)

○葉分の霜は猶結びけり—「葉分の霜」は、葉の一枚一枚に置く霜の意。「葉分の露」の例が目につく中で、「葉分の霜」の初例は、源氏物語の螢兵部卿宮の歌である。

・朝日さす光を見ても玉篠の葉分の霜を消たずもあらなむ(藤袴巻 四〇四)

兵部卿宮は、「葉分の霜」にはかない自分をたとえている。その後、この語は、定家によって本歌取されて、冬の歌に生かされた。

・冬きては一よふたよを玉篠の葉分の霜のところせきまで(「冬のはじめの歌とてよめる」千載集 冬 四〇〇)

源氏物語歌では、葉分の霜の量はむしろ多くはないが、千載集定家歌においては、「ところせきまで」にびっしりと置いた霜として詠まれてお

り、35番歌では、定家の表現を押し進めた形となっている。「猶」は、それでもやはり、それでもものとおおり、の意。

▽35番歌は、嵐が払っても払ってもなお霜が結ぶ、という厳しい、葛藤のある風景を詠んでおり、「嵐吹寒草」の題の荒涼たる感をよく表している。

36

○柴の戸や―「柴の戸」は柴で作った戸の意から、粗末な草庵の意。題の山家にあたる。「や」でいったん切れ、二句以下に続く。

○さしも寂しき深山辺の―「さしも」は、戸を「鎖し」の意に、「然しも」を掛ける。深山辺自体が寂しい場所であるが、その柴の庵に戸を鎖しているということ、この上なく寂しい場所を提示する上句である。三句末「の」は、詠嘆をこめてここでいったん切れ、下句に続く。

○月吹く風―月の皓々と照る上空を風が吹いている情景のよく浮かぶ感覚的な表現である。あるいは雲が風に飛ばされている風景も浮かぶ。この句を含む下句に歌の中心があるといえよう。この句を最初に詠んだのは、静空である。

・心すむ柴のかり屋のね覚かな月吹く風にましくなくなり（「旅」御室五十首 九六）

後鳥羽院は、36番歌が俊成に絶賛された後、さらに二度までもこの句を使っている。

・故郷の月吹く風になよ竹のなよりあひてもいく夜へぬらん（「月前竹風」仙洞句題五十首 一五〇）

・浅茅生の月吹く風に秋たけてふる里人は衣打つなり（「月下擣衣」撰歌合 建仁元年八月十五日 二七）

○さ牡鹿の声―牡鹿の妻呼ぶ声は秋の哀れを知らせるものとして詠まれてきた。月と鹿の声がともに詠まれた例も多い。

・思ふこと有明がたの月影にあはれをそふるさ牡鹿の声（「曉鳴鹿といへる事をよめる」皇后宮右衛門佐 金葉集初度本 秋 三二四）

・たぐひなき心ちこそすれ秋の夜の月澄む峰のさ牡鹿の声（「月前鹿」山家集 秋 三九七）

・ね覚のみすずのしのやに聞ゆなり月に妻どふさ牡鹿の声（後鳥羽院仙洞句題五十首 二一〇）

また、鹿の声が風につけて聞こえてくるといふ発想の歌も、千載・新古

今時代以降に多数詠まれており、36番歌も一例である。

・尾上より門田に通ふ秋風に稲葉をわたるさ牡鹿の声（寂蓮 千載集 秋下 三三五）

・たぐへくる松の嵐やたゆむらん尾上にかへるさ牡鹿の声（「百首歌よみ侍りけるに」良経 新古今集 秋下 四四四・後京極殿御自歌合 建久九年）

ここでは右の両趣向を統合し、凝縮して、巧みに表現している。

難陳・判詞

○あな面白―ああ、趣があるなあ、の意。面白しは、「心がたのしみ、なぐさめられるさまを言うのが本義であり、やがて興味がある、趣がある、さらに一風変わっているなどの意に転義する」（和歌大辞典 明治書院）。ここでは、36番歌の特に下句の「月吹く風にさ牡鹿の声」という気の利いた表現に対して発せられたものであろう。「あな」という感動詞（あるいは感動詞としての「あはれ」）が判詞内に現れるのは珍しく、俊成の自在さがうかがわれる。

▽上句は、深山の「山家」のこの上なく寂しい様子、それに対して下句はそこでこそ味わえる「秋月」の面白き風情である。

▽難陳の応酬は、「寒草」の解釈に関わり、篠を寒草としようかどうかを論じている。右が篠は常緑だから枯草には当たらずと難じたのに対して、左は篠は草であり、寒い冬なのだから、寒草に当たると陳じている。

「寒草」題の歌の用例を見ると、確かに、萩、葛、蓬、葦、萩などさまざま詠まれているが、篠の例は無く、難は当たっているようにも思われる。ただ、冬草の用例であるが、堀河百首に次の歌があり、俊成の脳裏にこの歌があった可能性は否めない。

・冬草とみえし春野の小篠原やよひの雨に深緑なる（「春雨」仲実 一六七）

ともあれ、俊成は自歌について、事の是非は明らかにしないままで、対する院の歌を「あな面白」と絶賛して、勝負を決めた。このあたりの俊成の捌きぶりは老練である。

十九番 嵐吹寒草

37 左持 保季
山嵐に枯野の真葛うちなびき霜に恨みや結び果つらん

38 右 山家秋月 雅経
よそに見し雲より奥に宿しめて梢に出る山の端の月

右申 云、葛の葉の恨みなどは、枯果てぬ折にや読べからん。
判者云、いづれも無殊事。為レ所持ト。

【校異】

37 かれ野のまくす―秋野、まくす (神)

38 雲より奥に―雲よりをちに (内・青二)、松かねの (刈)

難陳・判詞

葛の葉のうらみなとは―葛の恨なとは (京・北)、くすのはのうらみ (彰・

神・青二)、くすの葉の恨なと (桑・中一・中二・松)

枯はてぬ―秋はてぬ (神)

折にや読へからん―思ひやよむへからん (宮)、折やよむへからん (京・

刈・北)、おりにや読 (虫損) (彰)、をもやよむへからん (内・青二)

為持―為勝 (神・中一・中二)

【他出文献】

38 明日香井和歌集 一〇五八 (新宮撰歌合 山家秋月) 第二、三句 「雲

よりくもに宿とめて」

【通釈】

十九番 嵐、寒草を吹く (嵐が冬の枯草を吹く)

左持 保季

37 山おろしの風に枯野の真葛は靡いて、霜として恨みを結んでしまふの

だろうか。

右 山家の秋月 (山家で見る秋の月) 雅経

38 よそ事のようにかけ離れたものと見ていた雲がかかる所よりまだ奥に

居場所を定めていると、(木々の) 梢のところにでてくる山の端の月で

あることよ。

右方が申し上げることには、葛の葉の恨みなどということとは、(葛が)

すっかり枯れてしまわない時に詠むべきであろうか。

判者が言うことには、いづれも、特にとりたてて言うべきことも無

い。引き分けとする。

○題―左右異題。左は「嵐吹寒草」、右は「山家秋月」。

37 ○山嵐―山から吹きおろす風。

○枯野の真葛―葛は、山野に自生するマメ科の多年生蔓草。秋の七草の一

つ。真葛は葛の美称。よく繁茂する有用な植物で万葉集からさまざまに

詠まれている。王朝和歌においては、風に翻って白い裏を見せる葛の葉

が印象的なので、「裏見―恨み」「秋―飽き」などの掛詞とともに詠まれ

ることが多くなった。

・秋風の吹きうらがへす葛の葉のうらみても猶恨めしきかな (平貞

文 古今集 恋五 八二三)

・我からと思ひ知れども真葛原返す返すぞうらみられける (紀伊 堀

河百首 恋 一二七九)

37 番歌でも「恨み」が詠まれている。「枯野の真葛」はこの歌が初出。

葛も枯れてしまえば、葉裏の白さは目立つものではなくなる。右方が

「葛の葉の恨みなどは、枯果てぬ折にや読べからん」と難じたのも、そ

ういったことからであろうか。

「枯野の真葛」の句は、後に

・日影さす枯野の真葛霜とけてすぎにし秋にかへる露かな (冬歌の中

に) 中務卿親王 続古今集 冬 五九三)

などと使われている。

○霜に恨みや結び果つらん―霜が「結ぶ」とこと、恨みを形づくることを

重ねて表現している。秋に葛の葉が白い裏を見せて恨みの感情を見せて

いたのが、冬になって、最後は、白い霜として恨みを結実させるのだろ

うか、というのである。

38 ○よそに見し―「雲」にかかる。雲はかけ離れた遠くにかかるものである

ことと同時に、その雲を自分と無関係なものと思つて見ていた、という

ことを「よそに」は表している。

・よそにのみ見てややみなん葛城や高間の山の嶺の白雲 (よみ人しらず

新古今集 恋一 九九〇)

これは、恋の相手を白雲にたとえて、右の二つの意味を掛詞としている

もので、参考になる。38番歌では、今までは高い山にかかる雲をただ遠くにあつて自分とは無関係なものと見ていたのだが、今は、その雲の近く、まだその奥のかけ離れたところに、「宿しめ」ることになったわけである。

○雲より奥―山奥の山家のある場所。隠者が住む所。この句は、次の守覚法親王歌が初出例で、同様の隠者の住む場所として使われている。

・山深くなる心のいかに又雲より奥に宿もとむらん（「山家」守覚法親王 正治初度百首 三九二）

○宿しめて―住まいとして定めて、の意。

・まだしらぬ山のあなたに宿しめて浮世へだつる雲かともみん（拾遺愚草 雑 四八六 早率露胆百首 文治五年）

○梢に出る山の端の月―梢は、山家の周辺にある木々の梢である。「よそに見し」時は、「山の端」に出ていた月が、雲より奥に住まいする今は「梢」に出るという意。

二十番 嵐吹寒草

左

越前

39 さらに又秋にもかへす嵐かな霜枯れ果つる萩の下葉を

右

勝 湖上暁霧

前権僧正

40 薄霧の汀をこむる有明の月にうらある志賀の辛崎

右

申 云「萩の下葉」を「秋にもかへす」とは、いかに詠めるにか。

左申云、あはれを又かへすなり。

判者云、「薄霧」すこし耳に立てども、歌のさま宜。仍リテ為勝ト。

【校異】

39 秋にもかへす―秋にもかへる（刈）

萩のした葉を―萩のしたはを（宮）

40 汀をこむる―汀をわくる（宮）

有明の―有明は（宮）、在明は（京・北・内・神・桑・中一・中二・青一・青二・松）

月にうらある―月にうらある（宮）

難陳・判詞

萩の下葉を―萩の下葉を（宮）、おきのはを（内・青一）、萩の下葉を（神）秋にもかへすとは―秋にかへすとは（宮・京・北）、秋にかへすと（内・青一）

いかによめるにか―いかゝよめるにか（内・青一）

あはれを又かへすなり―あはれをかへすなり（宮・刈・内・青一・京・北）うす霧すこし耳にたてとも―うすきりすこしみにたてと（宮・刈・京・北）、うす霧の霧少耳にたてとも（青一）

歌のさま宜―歌さまよろし（京・中一・中二・松）、歌様宜（内・青一）歌さまおろし（桑）

仍為勝―仍為勝（青一）、仍為とす（桑）

【他出文献】

40 三百六十番歌合 秋 三九四

【通釈】

二十番 嵐、寒草を吹く（嵐が冬の枯草を吹く）

左

越前

39 もう一度また、秋の哀れな風情に返す嵐であるよ。すっかり霜枯れてしまった萩の下葉を（風の音をたてて）。

右

勝 湖上の暁霧（湖の上にかかる暁の霧）前権僧正（慈円）

40 薄霧が湖の汀に立ちこめる（有明の月のころの）明け方は、有明の月に思いのこもる志賀の辛崎であることよ。

右が申しますことには、「萩の下葉」を「秋にもかへす」とは、どのような様子として詠んでいるのか。左方が申しますことには、それは「あはれ」を再び返すということである。

判者が言うことには、（右歌は）「薄霧」が少々耳障りだけれども、歌の様が結構である。それゆえ右を勝とする。

○題―39は「嵐吹寒草」、40は「湖上暁霧」、題の異なる一番。

○秋にもかへす―嵐が冬の萩の様子を秋に返す、ということ、秋の萩の哀れを再び蘇らせることを詠むか。この句の前例は定家の一首のみである。

・花を思ふ心にやどる真意原秋にもかへす風の音かな（「花」拾遺愚草）

六四七 花月百首 建久九年

これは、「真葛原」と「返す」の縁語関係（風が葛の葉裏を返すことから裏見―恨みの掛詞を引き出す）を踏まえて、風が秋を思い出させることを「秋にもかへす」というのである。

39番では、この句の意味がわかりにくいので、「いかに詠めるにか」と右方から質問が出ている。左方は「あはれを又かへすなり」と答えている。萩に吹く風の音は、秋の「あはれ」を代表するものであることから、このように答えているものであろう。

・萩の葉をなびかす風の音聞けばあはれ身にしむ秋の夕暮（「秋」相模集 五四八）

・いとどしく物のかなしき夕暮にあはれをそふる萩の上風（「萩」永縁堀河百首 六八四）

○霜枯れ果つる萩の下葉―霜のためにすっかり枯れてしまった萩の下葉、の意。霜枯れの萩を風の音とあわせて詠んだ歌を挙げておく。

・霜枯れは侘しかりけり秋風の吹くには萩のおとづれもしき（「雨風激しき日しも訪れ給はねば、聞こえさする」和泉式部集 四〇六）

これは、裏に恋の相手の音信の無い状態を「霜枯れ」にたとえて、萩の風の音がしない状態を詠んでいる場合である。このように、萩の葉音の季節は第一には秋なのである。しかし、新古今時代になると、冬の霜枯れの萩の音も注目されるようになっていく。

・霜枯れてもろく砕くる萩の葉を荒くわくなる風の音かな（「枯野草」山家集 五〇九）

・霜枯れの萩の葉さやぎ霰ふり告げがほにてぞ冬は来にける（守覚法親王 御室五十首 三二）

・秋に又吹きかはりぬる風の音も猶霜枯れの萩の上葉に（「冬」慈円正治初度百首 六五九）

「秋にもかへす」への疑問も、このような冬の萩の音が詠まれるようになったが故に出てくるのもあろう。

なお、萩風は、「上風」「上葉（に吹く風）」と詠む例が、「下風」「下葉（に吹く風）」と詠む例よりも圧倒的に多い。また、萩の下葉の風は、夏の終りにしのびに通う秋風として詠まれるのが普通である。この歌で、「下葉」が選ばれているのは、「霜枯れ果つる」と響きあって、萩がすで

40

に無惨なさまになっていることを表すためであろうか。

○薄霧の汀をこむる有明―薄霧が湖の汀を覆って立ちこめている夜明け方、の意。三句「有明の」は他本では「有明は」となっており、この方が、下句との格関係がわかりやすい。底本のように「の」であっても、まずは詠嘆性の「の」として三句末でいったん切れ、その上で「有明の月」と下句へかかってゆくという、句の切替きとなる。

○月にうらある―有明の月である。夜明け前の、十六夜以降の月である。「うら」は心の意で、「うらもなし」（なにげない様子だ、無心だ、くつたくな）という慣用的表現として使われたが、新古今時代には「うら（心）」に「裏」を掛けた上で、「うらある」という表現がみられるようになった。

・萩が枝の露に心のむすばれて袖にうら有る秋の夕暮（「中宮月次の御屏風に、草花の歌とて」円位法師 玄玉集 六四九）

・もみぢ吹く風のたよりに月落ちて霜にうらある庭の面かな（慈円拾玉集 五四一四 建久四年）

・聞くにさへ涙ぞこぼる木の葉落ちて霜にうらある庭の月影（俊成拾玉集 五四二四 建久四年）

・返すとも雲の衣はうらもあらじ一夜夢かせ木枯の風（「旅宿」壬二集 一九〇九）

40番歌は、「浦」の意味を志賀の縁語として響かせつつ、月に風情がある、月に情趣を覚える、といった意味を表していると考えられる。

○志賀の唐崎―近江国歌枕。現在の滋賀県大津市唐崎、唐崎神社のあたり。2番歌注参照。唐崎と月に霧を取り合わせた歌としては、新古今時代までには40番歌以外には鳥羽院に例がある程度である。

・さざ波や志賀の浦わに霧はれて月すみわたる唐崎の浜（「水上月といへることをよませ給うける」鳥羽院御製 続後拾遺集 秋下 三三七）

しかし、これは「霧はれて」とある例であり、霧がたちこめている40番歌とは異なる。

▽判者俊成は「薄霧すこし耳にたてども」と言っている。「耳にたつ」は、歌評用語で、耳障りであるという否定的評価の語である。六百番歌合で

家隆の

・煙たつ賤の庵か薄霧の籬に咲ける夕顔の花（二七〇）

について、「左方申云、いほりか薄霧、耳にたつ」と難陳があつたのに対して、俊成は「判云、……右、薄霧、共尤不宜」としている。左方が詞統きに關して難じているかとも見られるに對して、俊成判は、40番歌に對すると同様に、「薄霧」という語について「不宜」としているようである。新大系『六百番歌合』脚注は、その「理由は不明」としている。俊成は、後京極殿御自歌合の

・ゆく舟の跡の白なみきえつきて薄霧残る須磨の明ぼの（「海路秋望」

一六一）

については、負としているものの「薄霧」の語を難じているわけではない。「薄霧」の語は、後に新古今集にも入る久安百首の清輔歌が初出の、比較的新しい表現である。

・薄霧の籬の花の朝じめり秋は夕べと誰かいひけむ（「崇徳院に百首歌たてまつりける時」新古今集 秋上 三四〇）

これは籬の花を透かしてみせる霧を「薄霧」と表現しているのである。

「耳にたつ詞のめづらしきは、ながことばにて候はぬとも、二字三字もあまたよみつれば、あさましき事にて候」（毎月抄）などともあるのを勘案すれば、「薄霧」がまだ歌語として珍しい語であり、かつ一首の中で、その必然性がわかりにくい場合に「耳に立つ」と言われているのかもしれない。

二十一番 嵐吹寒草

左 左大臣

41 木の葉散りて後はむなしき外山より枯野の草に風落つ也

右 勝 湖上暁霧 女房

42 新統古

志賀の浦やにほてる沖に霧こめて秋もおぼろの有明の月

左右未申先に、判者云、右歌、殊に以染心肝。左又いなりといへども、尚、以右ヲ為勝よし申之。

【校異】

41 かれ野の草に―枯野の原に（神）

42 にほてる沖に―にほてる奥に（宮・彰・刈・神・桑・中一・中二・青二・松）、にほてる月に（京・北）、にほてるおきを（内・青二）

難陳・判詞

左右未申先に―左右いまたまうささる以前（宮・刈・内・青二）

殊に染心肝―ことに染心肝（宮・京・彰・内・神・桑・中一・中二・北・青一・青二・松）、殊染（虫損）（刈）

ゆうなりといへとも―雖優（刈）、無難優（内・青二）

尚以右為勝よし申之―以右為勝由申之（彰）、尚以右為勝より申也（神）、猶以右為勝由申（桑・中一・中二・松）

【他出文献】

41 秋篠月清集 一二七二（「院撰歌合十首内、嵐吹寒草」）

42 新統古今集 秋下 五四九（「建仁元年三月尽歌合に、湖上暁霧といふ事をよませ給うける」第二句「にほてるおきは」・後鳥羽院御集

一五三一「湖上暁霧」第二句「にほてる沖は」・三百六十番歌合 秋 三六一・夫木和歌抄 雜五 一〇六二三「にほてるおき 建仁元年十

首歌合、湖上暁霧」）

【通釈】

二十一番 嵐、寒草を吹く（嵐が冬の枯草を吹く）

左 左大臣（良経）

41 木の葉が散ってしまつて、その後は何もない外山から、（麓の）枯野の草に嵐が（落ちるように激しく）吹きおろしてくる音がすることだ。

右 勝 湖上の暁霧（湖の上にかかる暁の霧）女房（後鳥羽院）

42 志賀の浦よ。鴉の海が匂うように光りを放っている沖は、霧が立ちこめていて、（春のみならず）秋もまたおぼろな有明の月であるよ。

左右の方人がまだ何も申し上げない先に、判者が言うことには、右の歌は、特に心に染みる。左も又優美であるけれども、やはり、右を以て勝とするよしを申し上げる。

○題―41は「嵐吹寒草」、42は「湖上暁霧」で左右異題。

41 ○木の葉散りて後はむなしき外山より―木の葉は外山の木々のもの。嵐は、

それを散らし尽くしたのである。木の葉が散ってしまったて後は、吹き散らすものとして何もない外山から、の意。外山は深山奥山に対して、人里近い、端の山をいう。下句の枯野に続く位置にある山。「むなしき」は、風の吹き散らすべき木の葉がなくなっていることをいう。

○風落つ也―嵐が吹き下ろす音が聞こえる、の意。「風落」という漢語は見あたらないが、「風落」(26番歌参照)からの類推で、このような表現が生まれたかと考えられる。風落は、漢語としての本来の意味は風が鎮まることであるが、和歌では26番歌のように風が上から下に吹き下ろすことを意味することがあった。「風落つ」も同様に、強い風が吹き下ろすことを意味しているようである。これも、外山から枯野へ吹き下ろす強い山風の風を表現する。この句は良経にはもう一例ある。

・打靡く岩本小すげ玉散りて風も落つる山川の水(「水風」秋篠月清集 一一八五)

また、本歌合と同年十二月の石清水社歌合で、秀能が

・高円の野路の篠原行きくらしかたしく袖に風落つなり(三〇)と詠んでいる。また後にも数例見られる。

・霜をまつ軒ばの紅葉まだちらであらしぞおつる庭の朽ばに(信実内裏百番歌合 承久元年 一四九)

・初瀬山檜原の風落ちにけり花にとまらぬ入逢の声(「古寺花」為尹千首 一三一)

・袂にや落つる風をうけぬらん刈る手そよがぬ山の下しば(「麓柴」為尹千首 八〇四)

・岩浪の色をぞ埋づむとなせ山紅葉の滝の落つる嵐に(「嘉元元年式部卿親王家統千首に、滝紅葉」藤谷和歌集(為相) 一四九)

「也へなり」は音が聞こえることを表す助動詞。

▽良経は、六百番歌合で、古郷のむなしき枝を吹く風を詠む次の歌を、判者俊成に賞賛されたことがあった。

・芳野山花の古郷跡たえてむなしき枝に春風ぞ吹く(一七九)

判云、左歌、むなしき枝に春風ぞ吹くと侍るこそ、よしの山などはふりにたる事とおぼえはべるものを、いづれの峰のおくにか様の詞のはな残り侍りけんと、猶このみちはつきすまじき事にこそ侍りけれと、こけの袖もいとどしをれまさりておぼえ侍る……

この歌は後に新古今集に入集した。41番歌は、むなしき外山から吹き下ろす風を詠み、類似の発想である。「風落つ」という新奇な表現があり、俊成判も「左又いうなり」と一応の評価はしているものである。

42 ○志賀の浦―志賀は近江国歌枕。31番歌注参照。初句末「や」で、切れ、一首の舞台を提示する。

・志賀の浦や遠ざかり行く浪間よりこほりて出づる有明の月(「撰政太政大臣家歌合に、湖上冬月」藤原家隆朝臣 新古今集 冬 六三九 正治元年)

・志賀の浦やけふたちかへる春風にこほらぬ浪も遠ざかりけり(寂蓮 正治初度百首 一六二三)

これらと同様である。

○にほてる沖―「にほてる」については27番歌注参照。「にほてる」は月の光などで、鳩の海が匂うように反射して光を発しているさまをいう。ここでは沖から月が出るために、沖の方が明るく光を放っているさまである。本歌合諸本は「にほてる沖に」とするものが多いが、底本の異文表記や、新続古今集、家集の本文のように「にほてる沖は」の形の方が場所をとりあげて強調する効果がある。この句は、やはり月とともに詠む良経の先例がある。

・唐崎やにほてる沖に雲消えて月の氷に秋風ぞ吹く(正治初度百首 四五二)

○秋もおぼろの有明の月―朧月は春のものを代表とする。

・照りもせず曇りもはてぬ春の夜の朧月夜にしくものぞなき(「文集、嘉陵春夜詩、不明不暗朧月」といへることをよみ侍りける」大江千里 新古今集 春上 五五)

・春の夜のおぼろ月夜やこれならむ霞にくもる有明の空(「後京極撰政の家の歌合に、暁霞をよみ侍りける」宜秋門院丹後 新勅撰集 春上 四七 正治二年)

「秋もおぼろの」は、春はもちろん秋もおぼろの、の意。

▽42は、俊成が方人の機先を制して、「右歌、殊ニ似染ム心肝ニ」と賞賛した歌だけあって、勅撰集などにも採択されている。

